

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2015年3月 NO.184



[もくじ]

- 2～3 高知の水は甘くない!?…島崎桃代
- 4～5 自主上映 三十七年目の境地～遺書…田辺浩三
- 6～7 仁淀川の川下に住まいして…葛岡哲男
- 8～9 座っている様が「あなただけ」の表現であるということ…筒井亮太
- 10～11 言葉の現場から50 褒姒の笑いのなぞ⑤…広井護
- 12～13 高知市文化振興事業団12～2月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

高知の水は甘くない!?

島崎 桃代

める。井戸から引いている水道代
いらすの水によって、私はいつの
間にか舌が鍛えられていたよう
である。



話変わって、私は高知で細々と
働く傍ら、アートを生きがいとし
て日々を過ごしている。

近年、全国各地で地域と一体に
なっているアートイベントが
盛んになっており、高知でもその
勢いを増している。私の知る限り
では、この町にて行われる「イノ
ビ・オーダー」、須崎市にて行わ
れる「現代地方譚アーティストイ
ンレジデンス須崎」が高知県内
の大規模なアートイベントになっ
てきていると思う。それぞれ特性
の異なる面白いイベントであるが、
昨年、縁があつて前者のイノビ・
オーダーと、福岡県福津市にある
津屋崎という町で行われた 28ZA
▽ 海浜博覧祭に参加した。

イノビ・オーダーは、先月号に
も掲載されていたが、この町の今
はもう使われていない商店街を展
示空間として利用した街歩き型の
アートイベントで、私は昨年の参
加で三回目になる。一回目は古民
家の倉庫、次は元レコード店、最
近は元薬局で展示を行ったが、イ
ベントに参加し、その家の持ち主
と対話することで、活気があつた
ころの商店街とその土地で暮ら
していた人々の営みが浮かび上
ってくる。昨年はイベント開催中
に、この大黒様のお祭りがあつた。
晴れ着姿の大人や子供たちの行列
や、たくさん屋根が並びにぎわ

二〇一五年一月十八日、日曜日、
十二時二十五分。私は瀬戸内海に
背を向けて、香川県・JR高松駅
から塩江行きのバスに乗った。紺
屋町、瓦町等、華やかな商店街を
通りすぎ、仏生山、鮎滝と、人気
の少ない山道を通過後、乗車して
一時間、最終駅の塩江にたどり着
いた。そして歩くこと一〇分。目
的地の高松市塩江美術館があつた。
ここでは、高知に所縁のある作家
の大木裕之さんの個展が行われて
おり、その最終日であつた。何と
かギリギリ間に合つた。

そうでない人には嫌厭されるだ
ろうが、この「ギリギリ癖」が、
高知県民には多いのではないかと
思っている。その日、美術館に訪
れた人の大半は、どこか見覚えの
ある高知の面々であつた。私は高
知に生まれてもうすぐ二十五年が
経とうとしているが、その中でも
ギリギリエピソードは多々ある。
いや、そんな話ではなく、もつと
高知の良いところを話したい。
このようにたまに県外に旅に出
ると、つくづく高知は住みやすい
ところだと実感する。いや、塩江
もなかなか素晴らしい温泉地帯で
あつたが、東京や大阪などの首都
圏に出て食事をするだけでも高知
の良さは分かる。例えば、水。日
本の飲食店では大抵、食前に水が
出てくるが、都心の水は硬く、臭
みがあつて飲めない事がよくある。
その点、高知の水は水道水でも飲

つて、その日、商店街は本来の活
気を取り戻したような気がした。
しかし、元薬局の家主さんは、少
し寂しそうだった。以前と比べ
ると、屋台の数も人の数もかなり減
っているようだ。こんなに仁淀川
の自然に囲まれている町なのに、
商店街を潤すことは至難の業であ
る。そしてより一層、地域一体型
のアートイベントの必要性を考え
させられる。

また、28ZAKI海浜博覧祭は、
津屋崎にある古い旅館を拠点とし
て行われるアートイベントである。
私は展示と、最終日に行ったパフ
ォーマンスに又もやギリギリ駆け
こみ参加したのであつた。津屋崎
というところは、高知では馴染の
ない人が多いであろうが、福岡で
も知らない人もいる日本海に面し
た小さな町である。その日の日本
海はなぜか大荒れで、攻撃的な波
しぶきにさらされ、砂交じりの海
水がともしよっぱかつた。いつ
もは穏やかなのに……とその土地の
人は言っており、太平洋の女をそ
れ相応にお出迎えしてくれたのだ
らうと、初対面の海にそつと会釈
をした。この会場である旧玉ノ井
旅館も、今は映画鑑賞会や貸しス
ペースとして使用されており、旅

館としての機能を停止した今も、
何とか近隣を盛り上げようとがん
ばっているようだった。

私は、高知から特産物である高
知麻紙を使用した版画等を展示し、
異文化交流を満喫した。中でも、
このアートイベントの目玉はパフ

ォーマンスであつたと思う。企画
運営メンバー兼作家である友清
さとさんは私をこのイベントに誘
つてくださった時、こんなことを言
っていた。「フクツノ精神デ人魚
ニナリマシヨウ」と。この「フク
ツ」とは、福津市の福津であり、
不屈でもある。私たちは、津屋崎
の海の波の音や、そこで拾い集め
た貝や石などを叩いた音などで作
られた音楽を背景に、腰巻などを
して人魚の姿に扮し、およそ二〇
分間、館内をジタバタした。この
パフォーマンスは、通称、腰巻事
件と呼ばれる事件に対する異議申
し立てでもある。それは、明治期
の画家・黒田清輝が初めてであるが、
昨年八月にも愛知県美術館にて起
こり話題になった、展示中の裸の
男性の写真がわいせつ物陳列に当
たるとして、その写真内の局部に
布を巻いて隠すという少し変わつ
た事件である。
ともかく、一度寂れてしまった

地方の町の活気を取り戻すために
は、アートでも何でも、「不屈の
精神」が必要不可欠であろう。私
は、このアートイベント、そして
日本海にそのことを教えてもらつ
たような気がする。

それでは、ここ高知、然り太平
洋からは何を教われればよいのだ
うか。

今回は他県のことを多めに盛り
込んだが、これを見て少しでも地
域のアートに興味をわいた方には、
是非、足を運んでいただきたい。
そして、各地にそれぞれの文化が
あり、それを支える人や作家と交
流してみるのはどうだろう。先ず
は最寄りの高知から。その土地の
文化は、そこに住む人はもちろん、
訪れる人によつても新しい価値観
が発見され、築かれていくものだ
と思う。最後に、いつもアートを
イベントを主体になつて企画運営し
て下さっている先輩方に感謝の意
を表したい。「ありがとうござい
ます！」

このようなイベントを実現させ
るのは、とてつもなく大変なこと
だ。

私も、高知の太平洋沿岸、崖淵
ギリギリで、明日のアートを考え
ていきたい。



しまむさぎ ももよ

一九九〇年 高知生まれ高知在住
高知大学教育学部生涯教育課程
芸術文化コース彫刻専攻卒業。
県内を中心に制作活動を行って
いる。

自主上映三十七年目の境地へ遺書

田辺 浩三

【大島渚監督】

この方は、私の情熱の手紙だけで、来てくれた。窪川原発に於ける国家権力の暗部も教えてくれた方なので、責任もあったのだろう。「少年」の三十五mmフィルム代と講演料も含め、三十万円必要だったので、高知シネマクラブを結成し、高知市で企画。大成功で、五百名も集まった。

【木下恵介監督】

この大巨匠も、大黒東洋士先生の呼び掛けだが、ただ来高に当たって私に木下作品の映画の試験があった。「日本の悲劇」(昭和二十八年作品)ラストシーン、列車に向かって自殺する演出意図を答えよ」に対し、偶々言った答えが正解だった。警察予備隊、自衛隊と再び軍隊を持ち、戦争する国になろうとする事に対し、庶民の反対の意思表現では？」

ただし、講演料が三十万円必要となったが、隣の旧土佐佐賀町が出してくれたのでここで企画した。

び「生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言」を上映。原発ジブシーの映画だったから、命を狙われだす。殺されても芸術や文化が大切や」と叫び出したら、映画界の大物達が来高してくれだした。何のルートもコネもお金もなく呼べた。

一人／＼、何故呼べたのかノウハウを印す。動いて、世の中を掻き混ぜないと、澱んで来るからネ。

【今井正監督】

窪川町からは、大黒東洋士と云

大学卒業後、二十二歳で旧窪川町に帰郷し、すぐ自主上映を始め。山田洋次監督の『家族』より最初はやたらにまだ観ていない作品を、ビデオも無い時代なもので、鑑賞したい気持ちで企画する。

原発騒動が華やかになるにつれ、映画上映を通して世間に、生きろ意味を訴えたい。二十歳で窪川シネマクラブを結成し、黒澤明監督の『生きる』から上映する。この辺りから上映の度に監督や役者達にメッセージを求め出す。

う映画評論家が出ており、大黒先生が声を掛け今井監督と二人で来る。町民には、「婉という女」を上映し、窪川高校では総見にて、講演と『海軍特別年少兵』の上映も。それをNHK高知放送局が三十分のTVドキュメントに製作する。すっかり今井監督は高知が気に入る。その後、四年間、八月に奥様と二人で高知に遊びに来る。県下二十ヶ所ぐらい監督の作品を上映して、ノーギャラで宿、食事を用意して頂けたなら、講演OKの企画を企てた。

【女優・岸田今日子】

窪川シネマクラブのスタッフ、美馬勇作(東京で役者の修行中、岸田さんと知り合いになる)の口添えで。ただし講演料が三十五万円だった。窪川町文推協主催で、彼女の主演映画『砂の女』も上映する。

この様な方々を呼びながら、原発騒動の町、窪川で、原発に反対しながら映画&JAZZのイベントをして、この地域の文化レベルアップを図る。その後、高知市に移り住み、小夏の映画会を始める。

四十歳。その頃から大黒東洋士の一番弟子、映画プロデューサー大塚和(南国市出身)を知り、彼の顕彰の為に映画上映会を始める。大塚和祭。その裏には、息子さんの大塚汎さんの力が大。

【熊井啓監督】

その大塚和作品上映会を薦めた方。あそこ劇場を借り、「地の群れ」を上映する。

その頃、黒澤明監督の『白痴』完全版三十五mmフィルムを発見し、熊井監督が三十億円の価値ありとの事でトラブルにも巻き込まれる。

なお、この企画もNHK高知放送局がTVドキュメントとして番組に。ギャラ無し。

【黒木和雄監督】

第二回の大塚和祭のゲストに。『祭りの準備』で、旧中村市ロケ作品。脚本の中島丈博さんが飛び入りする。

【役者・原田芳雄】

この『祭りの準備』の主演男優。ギャラ十万円掛ったが。ファンの女性が沢山来る。

【女優・左幸子】

昔、衆議院議員井上泉さんが、僕の友人だからとの事で旅費も出した上、呼んでくれた。『飢餓海峽』上映と。県内の映画評論家細木秀雄先生が接待する。なお大好きな『彼女と彼』(ベルリン国際

映画祭主演女優賞一九六三年)の質問をすると怒り出す。今だに、元夫、羽仁進が許せん」とか。

この様に数々の映画人達を高知に呼んで来た。情熱と映画に対する愛情を文章に書くか、電話で直接頼み込む。十六面体のトンボの眼で真理を見た上で、ビリヤードの玉の動きを考える。そして、時間の流れを見て、社会や人間の繋がりをスイスイと結び付けてゆく。それが大事です。結局、行政マンみたいにパッケージとして企画そのものを買う様では、高知市内の文化レベルアップは図れない。

窪川時代、レコード店を経営していた時、高校時代のアルバイト上田かおり(のちのDJカオリ)にこう言った。コネも金も無い。それでも出世するなら、自分の尊敬するアーティストよりも、その人の過去の人生を知っておく事。絶対、感激して鼻にする」と。カオリはニューヨークでそれを実行し、今では年商四十億円、世界No.1の女性DJとなる。

私は、もう間も無く六十歳になり、定年の歳に。親父はこの歳に糖尿病の心不全で死んだ。私も同じ病気なもので、眼が失明に成り掛っている。それでも死ぬまでは邦画の自主上映をと。二〇一四年三月十四日(土)に龍馬の生まれたまち記念館で、遠藤周作の遺作『深い河』(監督熊井啓・主演奥田瑛二)の上映と、高知市避難者あざらしサラダさんの(食・土壌の放射能汚染)講演会を企画する。子や孫達のこれからの日本の運命が心配でならない。この気持ちを、この企画で表現する。

戦後、七十年記念の催しだが、私の自主上映三十七年間で辿り着いた境地とは、私が死んだ後でも、高知市内の若者達が平和で放射能汚染にも巻き込まれず、しっかりと生きや」と云う祈りだった様な気がする。

たなべ こうぞう

一九五五年 窪川町生まれ
小夏の映画会主宰。

仁淀川の川下に 住まいして

葛岡 哲男

仁淀川の下流に在住し三十五年になります。仁淀川大橋から見える広い川原には水が青く蛇行して流れ、台風後などは大雨で褐色に濁った荒い波が周囲を威圧する様に堂々と流れ、また直ぐにその水量を減らし元の静かな流れになっていました。

東京在住の子供が一匹の犬を送って来ました。寒い冬の夜、高知空港に受け取りに行ったことを昨日のように覚えていますが、フラットコート・レトリバーと云う黒い大型犬の子犬でした。

やがて大きくなり、山や川で遊ぶようになりました。川と一緒に歩いて気が付いたのですが、川原の石と違って流水の中にある石の美しさ、青・緑・赤・真白・黒など五色に驚きました。あるとき投げた石が真二つに割れた時、こんなに丸くなるまでの悠久の時間を突然思ったのです。以来石はむや

みに投げることはできませんでした。



この犬も先年逝き、この川原に遊ぶことも最近はありません。しかし、この石達への関心は残っていました。今、さらに石を求めて佐川の地質館、越知の横倉山自然の森博物館を妻、孫、友人達と時々訪ねます。そしてなぜ石が美しいのかも学びました。横倉山の

が続いております。

そうして手術が近くなり、入院二日前、六月十九日の夜九時前のことでした。簡易車庫の私の車にホテルが飛んで来るではありませんか。しかも差し出した私の人差し指に止まったのです。この感激は忘れません。私も元気に帰って来ることをこのホテルに約束しました。

以前より小川の前に立て看をしてあります。(水路に「ふた」をしないので！鎌田井筋の支流として三百余年の歴史ある水路である。ふたをすると藻が生えなくなり、小魚・ホタルなどの小生物が住めなくなり、どぶ川になります。この水路を守ろう！そしてこの自然の持続を！)

仁淀川の河口まで行きますと太平洋に面し壮大な景色になります。ここはサーファーにとって非常に良い場所だそうです。ニュージブランド(以下NZ)出身の私の英語のチューター、S・スコット先生は学校教師であり、写真家、ジャーナリスト、サーファーでもあります。この川は世界でも素晴らしい場所とのことです。昨年夏はNZからプロ



河口近く、波に向かうサーファー
被写体：Hayashi Kenta
撮影：S・スコット

のサーファーが数人来高し、一昨年は有名な画家ラッセンが秘書と一緒に来ていたそうです。

スコット先生によると河口近くの渚はほとんどが五色の玉砂利であり、なだらかに沖まで傾斜し、四季の風・波力・川の水量の変化が全体の砂利の型に変化を及ぼし、サーファーにはいつも違う変化のある波だそうです。先日も北山に雪が降り、強い北風が吹く日、スノーでサーフィンし、川の水はとて冷たい一方で海の水は温かく、仁淀川の山峡からくる北風が

クサリサンゴや佐川の直角石は、四億年以上前の海の生物であると説明されてきました。私たちの遙かに遠い先祖達は、昔海に住んでいたとされています。

もし万一、仁淀川の川原で越知のようなサンゴ等の石が見つかれば、仁淀川の歴史は陸上生物以前と考えられる。こんな空想すら浮かびます。兎にも角にも、今の私達は四十七億年の地球の歴史の瞬間に生きている事を思います。私達が遊んだ上流には野中兼山による八田堰があり、春野町、高岡町には井筋として今も灌漑用の仁淀川の水が流れています。私の家の前には、幅一・五メートルのコンクリートの三面張井筋から直角にまがった川(小井筋)があり、幅〇・七五メートルの両側の石垣は昔のままで、亀形に石を切ってはめ込んで築かれています。一部暗渠になっているもの、全長約十五メートルの川面を出しています。

小川には藻がみられ、金魚藻のあることも指摘されたことがありましたし、新潟から訪ねて来た夫妻が今でも綺麗な小川が流れてい

すばらしい波をつくったと聞きました。

河口の玉砂利は、西からの海の流れに乗ってさらに東に移動し桂浜の五色石にもなっています。私は子供

の頃高知市におり、桂浜は巡航船で来た遠足の子供にとつて、広く大きな太平洋の見える唯一のところでした。以来、先輩の大学入学時などの節目節目にはよく来ました。この場所は大きな未来への希望を与えてくれるからでした。

この間、ほぼ七十年になります。終戦七十年と重なります。引揚者の私には戦火の経験はありませんでしたが、終戦の高知市は五丁目から下の中心地はどこまでも続く焼け野原でした。その頃やつと電車が通っており、その音は今も同じで、眼を閉じると電車の音も同時に七十年前の草木も何もない荒廃の光景が浮かびます。

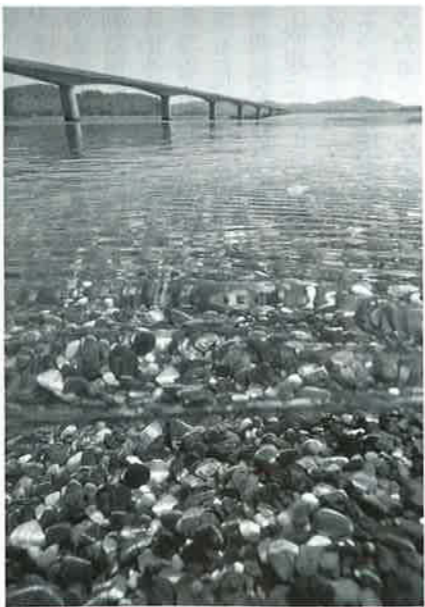
四年前の東日本大震災、原発事故を第二の敗戦と称する人がいます。私もそう思います。地震・津



た印象を語ってくれます。

この小川に、約十年前より梅雨のころにホテルが出ることを知りました。迂闊にも気付くのが遅かったのです。そこには市役所の駐車場を照らす街灯のある二本の電柱があつて、雨期になると葉っぱの雨露が蛍光灯に反射して、ちらと見るくらいではホテルの光とは区別が難しいかもしれせん。しかし、すぐにわかるでしょう。ホテルの光には、生き物の持つリズム、拍動があるからです。

私事ですが、三年ほど前心臓の手術を受けることになっていました。ちょうど六月の梅雨のころで、この時期、家の外灯は消灯してはいますが、その年は一晩に二、三匹のホテルしか見られませんでした。だんだん少なくなってきたので、祈るようにその光を求める夜



美しい川を彩る五色石
撮影：S・スコット

波の被害は時を経てはある程度修復出来ますが、原発事故の被害は何十年何百年も続くのです。眼に見えない人工放射線は人・自然を脅かし続けるでしょう。事故も解決しないまま、放射性物質を母なる海へ流し続けています。

いま、この国を守ることは何よりも優先して、人・自然を守ることであり、世界・未来もなくしてしまおう水・海への汚染を防ぐことが急がれます。

くずおか てつお

一九三五年 樺太、真岡生まれ
高知育ち
開業医。

座っている様が「あなただけ」の表現であるという」と

筒井 亮太

スコットランドのロック・バンド「プライマル・スクリーム」は「カメレオン・バンド」と呼ばれることがある。アルバムを生み出すごとに、メンバーも音楽性もコロコロと変えているからだ。しかし、それでも強い求心力を持ち得ているのは、その表現がまさしく「原始の叫び」であり続けているからだと思う。

私が舞踏カンパニー「大駱駝艦」の舞踏手、田村一行さんと出会ったのは二〇一四年の一月、「平成二十六年度公共ホール現代ダンス活性化事業」(以下、ダン活)の研修プログラムでの事である。

高知市文化振興事業団に採用され、一年目の終わりに初めて任された大きな事業が、全く知識のない「ダンス」であり、その中でも解釈が困難とされる「コンテンポ

ラリーダンス」であった。

ロック・ミュージックばかりに傾倒していた私が、やっと他の芸術活動を面白いと思えるようになったところのことだった。

担当に決まった後は、とにかく資料を集め、貪るように知識を求めた。コンテンポラリーダンスは、どうやら世界のダンスシーンにおけるパラダイムシフトのようなものであることは捉えられたが、知れば知るほど、その世界が自分からあまりにも遠いものだと感じるばかりだった。

今振り返れば、「微動だにせず体育座りする」という「踊り」を、文字情報で理解しようということ自体が無謀だと思う。しかし、遠い世界だと感じながらも、同時にある疑問が沸々と湧き起こってきた。

「数多ある表現に、優劣は存在しているのか？」

田村一行さんは、この疑問に対して見事に道を示してくれた。

「天賦典式(この世に生まれ入ったことこそ大いなる才能とす)」という大駱駝艦の考えのもと生み出される舞踏の世界は、想像以上に心からの表現だった。一行さんは、言葉に表せない衝動を、「あなた」の感動を、美しいと語った。それこそが個性であり、才能だ。この衝動や感動は誰しもが持つものである。日々の生活の中で見つけた、ほんの小さなものでも、その人の感動は誰も否定できない。この時一つの着眼点を得た。感動を舞踏という表現にしている「だけ」だと考えるかどうか。その表現が、人によっては音楽であったり絵画であったり、ロックで

ップの門戸は広くし、アウトリーチは物理的・理性的に芸術と遠い、また、表現に悩み、新しい価値を見出したいと考えている方々に参加していただくことを考えた。

白塗り・剃髪の眼光鋭い男が一面に配置されたチラシをいきなり見せられ、「舞踏のワークショップをそちらで開催させていただきますか」と言われて、直ぐに承諾するということは、稀なことだと誰でもわかる。

しかし、私の拙い説明を聞き、面白そうだとアウトリーチを快諾してくださった、アートセンター画楽、高知市立土佐山小学校、高知県立追手前高校演劇部、高知市教育研究所の皆様には、心からの感謝を申し上げます。

中でも高知市教育研究所のアウトリーチでは、学校生活に上手く馴染めない子ども達を対象としており、実施を断念しかけたこともあったため、本番のアウトリーチが始まったにもかかわらず拭えなかった。

ところが、最初は緊張し、散漫としていた子ども達が、一行さんの「既存の価値観を疑う話」に徐々に引き込まれ、その後の身体表現を体験する時間では、とても豊かな個性を開いてくれるのを見るこ

とができた。

まよめの「天賦典式」の話では、皆真剣に耳を傾け、頷き、最後には笑顔で挨拶をしてくれたことが強く印象に残り、力強い後押しを受けた気持ちだった。

公演は、高知の文化を取り入れた特別な演目『薔薇とお接待』を用意していただいた。遍路文化を演出する花道や、山門の仁王像を模したような舞台、土佐の酒宴などの要素を随所に盛り込み、全体として「旅」や「縁」など、人生を思わせるものでありながらも、開演直後に歌のパフォーマンスを取り入れる、ステレオタイプな舞踏公演とは一線を画す内容であった。

新しい舞踏の形、そして表現の面白さを、全ての来場者を感じていただけたと思う。超満員の会場で、終演後も鳴り止まないカーテンコールの拍手が、今も耳に残っている。

振り返れば、不思議な縁を感じることが多いダン活であった。大正時代に大駱駝艦の拠点の近くに住んでいたこと、かつてアートセンター画楽で大駱駝艦創設メンバーの方がダンスワークショップを実施していたこと、全く別のイベントで知り合いワークショップ



に参加してくれたダンサーさんが大駱駝艦の皆さんとお知り合いだったこと、田村一行さんのお兄さんが遍路をしていたことなど、奇妙な巡り合わせを勝手に感じている。

ダン活は、本当に多くの方々に支えられて成し得た事業だと実感している。地域交流プログラムや公演の参加者・来場者の単純な数字以上に、関わってくれた多くの方々に表現の楽しさを伝えられ

あったりジャズであったり、文章や書やファッションや料理や裁縫や怒り方や笑い方や…となる。何らかの巡り合わせである表現にたどり着いたのだとしても、その心の衝動は同じものなのではないか。すべての表現に等しく尊重される「原始の叫び」があるのではないか。

全く先の見えないダン活の展望が開けた瞬間であった。単なる「ダンス」の紹介ではなく、「こんなにすごい表現がある。しかも皆が持っている衝動から生み出されたものだ」と伝えればきっと共感してくれる人はいると考えた。ダン活は公演だけでなく、公募ワークショップやアウトリーチといった、直接的に地域住民に芸術を体験してもらう「地域交流プログラム」の実施も必要となる。「ダンス」を届けるということでも頭を悩ませていたことも、「表現はすべての人に共通する」と考えると、様々な人と感動を共有したくなってきた。

勿論、高知に住むすべての人々に、一度に体験してもらうことはできない。どうしても共有できる人は限定的になるが、それでも田村一行さんとの出会いに感動を得てもらいたいと、公募ワークショップ

つながりを持てたことが、一番の成果だと思う。

また、たくさんの人と一緒にあって、共感し合いながら事業を進めたいと思う。それが舞踏でもロックでもなんでも、だ。

これからも「原始の叫び」を追いかけていきたい。

つづい りょうた

一九八八年 高知市生まれ、旧吾北村出身

「平成二十六年度公共ホール現代ダンス活性化事業」担当。この事業は、二〇一五年一月二十日から二十六日の一週間をかけて実施したもの。四カ所のアウトリーチ、二日間の公募ワークショップを経て、二十五日(日)に高知市文化プラザかるぽーと小ホールにて、『薔薇とお接待』(入場者 九十五名)を上演した。

褒姒の笑いのなぞ⑤

いよいよ最終回である。「褒姒の笑い」の山場は、次のように始まる。

幽王の十一年の首めのある夜、王は申侯、西夷、犬戎の連合軍である大兵団が鎬京を目差して進撃しつつあるという報を受けた。全く寝耳に水の事件であった。この最初の報を受けた時は、反乱軍の先鋒は既に城内へはいろうとしていた。幽王は急を国人に告げるために烽火に火を入れることを命じた。(褒姒の笑い・新潮文庫「樓蘭」所収)

T「寝耳に水の事件であった。」とあるけど、誰にとって「寝耳に水」だったの？
P「幽王」
T「そうだね。「寝耳に水」ってどういうこと？」
P「びっくり仰天」
T「そのとおり。幽王は驚愕した。」

でも、おかしいでしょう。

最初に烽火に火を入れたのは幽王の七年だった。駆けつけた家臣たちは、「ただ呆然として山嶺の火に見入る計り」。幽王の八年、九年、十年と同じことが続いた。こんなことが続けば、家臣だって幽王を信用しなくなる。反乱が起こっても不思議はない。なのに幽王は仰天した。なぜだろう？

P「幽王はアホだった！」
P「自分がしていることがわかってなかった」
P「それくらい褒姒に夢中になっていた」
P「褒姒の笑いを見たくて、麻薬中毒みたいになって、火を入れた」
T「きつとそうだね。もう一つおかしいことがある。「この最初の報を受けた時は、反乱軍の先鋒は既に城内へはいろうとしていた。」とある。中国大陸は広いよ。反乱軍は、異民族の西夷や犬戎との連合軍だ。辺境からやってくる。なのに、最初の知

らせを受けたときは、反乱軍の先鋒はもう、鎬京の城内へ入ろうとしていた。おかしいよね。速すぎる。これは何を意味しているだろう？」
P「反乱軍を見た人が、誰も幽王に知らせなかった」
P「周の人は、みんな幽王をみかぎっていた」
T「そうだね。幽王は、国中から孤立していた可能性が高い。実際、幽王は烽火に火を入れさせたが、王宮に駆けつけてくる兵はいなかった」

王宮の庭に矢が繁く落ち出した頃、幽王は褒姒と一緒に寢室の前の石を敷き詰めた露台の、勾欄を廻らしてあるきざしは石の上立っていた。露台の石の面も、勾欄も、幽王の顔も、褒姒の顔も、山嶺の烽火の火の照り返しで、夕焼けの残照でも浴びたように赤かった。城市の方では何箇所からか煙が上がり始め、どこからともなく聞こえて来る異様などよめきと騷擾は刻一刻高まりつつあった。(同書)

T「露台」はテラス、「勾欄」は手すり、「きざし」は階段のことです。幽王と褒姒は、寢室の前のテラスにある展望用の階段の上立って、手すり越しに街を見下ろしていた。驪

たことからくる笑い……
T「たぶんそうだね。だけど、それが痙攣の泣き笑いだったのはどうしてだろう？」
P「ここからは私の主観的読みである。褒姒は家庭から拒まれた子どもだった。家庭から拒まれることは、世界から拒まれることを意味する。褒姒と世界は絶対に入れない関係にあった。この世界が存在するかぎり褒姒の心は凍りついたままだ。褒姒は、世界を滅ぼすことによって感情を取りもどしたのだ。」

なぜ褒姒は世界を憎んだのだろう。それは褒姒が、本当は世界に受け入れられたかったからだ。世界の中に自分の「居場所」を見つけたかったからだ。だが、褒姒の「居場所」はどこにもなく、世界は褒姒を冷たく拒絶していた。だから、褒姒は世界を憎み、満たされない憎しみを意識下へ抑圧した。憎しみを意識すること自体が褒姒を傷つけたからだ。

だが、世界が滅びる時、憎しみは抑圧の必要を失った。憎しみは意識の中に躍り出て、強烈な満足をもたらした。その表現が、高らかな褒姒の笑いだった。

しかし憎しみのさらにその底にあるものは、世界に受け入れられたい、「居場所」がほしいという切ない願いだった。ところが、その世界

山頂の烽火の火が、夕焼けの残照のように二人を染めあげた。

「夕焼けの残照でも浴びたように……」という比喩が強烈だね。残照って何？」

P「夕陽の名残」
P「照り返しの残り」
T「そうだね。それが消えたら、あたりはどうなる？」
P「暗くなる」
P「闇になる」

P「そう。陽が落ちる直前の最後の明るさが「残照」だ。この比喩には「滅び」のイメージが隠されている。滅びの色が「露台の石の面も、勾欄も、幽王の顔も、褒姒の顔も……」オーパーに言えば、世界を染め上げていた。……もう一つ。残照の赤さは、何を連想させる？」
P「血の色」
T「そう。王宮は、血潮を浴びたように赤く染まっていた。これから血なまぐさい悲惨なことが起こる暗示だね」

この直後、数人の兵がやってきて、城から逃れるための輿が用意されたことを告げる。クライマックスだ。

この時、幽王は褒姒の笑い声を耳にした。玉でも転がすような琅々とした少し甲高い笑い声であった。幽王は妖しい褒姒の

は、今日の前で崩壊しようとしていた。褒姒を受け入れてくれる世界は、もうない。感情を取り戻した褒姒は、絶対的な孤独の中で、泣きながら笑っていたのである。

世界の没落と引き換えに感情を取り戻した褒姒の高らかな勝利の笑いであると同時に、心を取り戻したときには、世界はすでに滅びつつあり、自分を受け入れてくれる場所はどこにもない。そういう運命の皮肉への痛烈なあざけりの笑い。それが、褒姒の最後の笑いだったのではないだろうか。褒姒の笑いは、哀切な笑いだったと思われるのである。

*この回で広井の連載は終了致します。長らくご愛読いただいたみなさん本当にありがとうございます！

ひろい まもる

一九五四年 高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。国語の教師。

顔に見惚れていた。褒姒は顔を少し斜めに仰向けて夜空を見入っており、口辺の筋肉がゆるんだと思うと、また笑い声がその口から漏れた。褒姒が笑った！と幽王は思った。褒姒が笑った、褒姒が笑った、褒姒が笑った！幽王は褒姒の顔に見入ったまま、褒姒から引き離されて、何人かの兵に取り囲まれて、慌ただしく北門の方へ移動させられて行った。

この反乱で幽王は殺され、褒姒は虜となった。……申侯の虜となった褒姒のその後については何も知られていない。(同書)

物語は終わり、(後書き的) エピソードが続く。

T「この時、幽王は褒姒の笑い声を耳にした。」ってあるけど、「この時」って、どういう時？」
P「輿が用意された時」
P「もう、逃げるしかない時」
P「国が滅びる時」
P「世界の終わりの時」
T「この時褒姒が笑う。二度目の笑いです。そして最後の笑いだ。『玉でもころがすようならろうとした少し甲高い声であった。』と書かれているけど、これ、どんな笑い声だ

と思う？『玉』って宝石だよ

P「宝石のように美しい声」
P「宝石のように高貴な声」
P「ろうろうとした明るい声」
P「前回と違ってはつきりした声」
P「前と違って、高い声」
P「ヒステリックな声」
T「ヒステリック？どうして」
P「少し甲高い声」って書かれていて、『甲高い』というのは、痙攣するみたいな感じだと思う……
T「そうだね。一種の痙攣的泣き笑いだったんだらう。『口辺の筋肉がゆるんだ』というのは、能面のように無表情だった顔に感情が蘇ったことを感じさせるね。」
さて、褒姒はなぜ笑ったんだらう。前回の笑いを思い出してほしい。幽王がはじめて烽火に火を入れさせたとき、褒姒は低い声でかすかに笑った。昔褒姒が家庭の中で味わったのと同じ疎外感を家臣たちが味わっていたからだ。これは、褒姒の家庭で起こった悲劇の再現だった。褒姒は、意図したわけではないけれど、被害者から、加害者へといつの間にか立場を変えていた。無意識の復讐者になっていたんだ。
前回と今回の笑いの意味はどう違うと思う？」
P「……前回は復讐のはじまりの笑いだったけど、今回は復讐が完成し

南河内万歳一座
「ジャングル」

二〇一四年十二月二十一日(土・日)、高知市文化プラザかるぼーと小ホールにて、南河内万歳一座「ジャングル」を上演しました。

南河内万歳一座は関西小劇場屈指の劇団で、高知では今回で八度目の公演となりました。公演を重ねる中で、万歳一座と高知の演劇人との交流も深くなつていき、多くのワークショップの開催や、劇団座長の内藤裕敬さんの指導により、高知の演劇人が創り上げた作品の発表を行うなど、いまでは高知の演劇を語る上で欠かせない存在となっております。

今回上演された「ジャングル」は、結婚式のサプライズにと、なぜかジャングルの中にあるトタン小屋に案内された花嫁一族を中心に、物語が描かれます。ジャングルの奥深くにいるのは猛獣？有象無象の集まり？ハッキリ見えない漠然とした不安の中、前に進むとうとして戻ってくる人や「私に付いてきなさい！」と根拠のない旗を振り回す人。いろんな立場の人たちが放つ台詞の中に、うっすらと何かが浮かび上がります。

二〇〇八年に初演された作品の再演でしたが、ほとんどの部分を書き直し、現代社会の馬鹿馬鹿しさや危うさを、大笑いさせながら考えさせる、これぞ内藤作品という会心の公演となりました。上演にあたっては、高知の演劇人が舞台運営や当日の会場運営にも参加し、公演終了後は大阪と高知の演劇を通じた熱い友情交換が行われたことも記しておきます。

〈入場者数・一一三名〉

カンパニー・ロディージョ
「人生の贈り物」

二〇一五年一月十日(土)、高知市文化プラザかるぼーと小ホールにて、カンパニー・ロディージョ「人生の贈り物」を上演しました。カンパニー・ロディージョは、イタリアを拠点に世界で活動を行う児童劇団で、これまで沖縄などの児童演劇祭に参加しており、縁があつて今回初めての高知公演とな



りました。

「人生の贈り物」は、カンパニー・ロディージョが以前松江市で開催された演劇祭に参加した際、ホームステイをした老夫婦宅での体験をモチーフに作られた作品です。言葉をほとんど交わさないのに心が通じ合う老夫婦を見て「幸福や喜びは言葉なしでも分かち合える」と気付かされたことが作品の原点となっております。実際の舞台でも言葉を使わずに、人生を重ねた男女の深い愛をユーモラスに、時にちょっぴりクレイジーに表現し、次から次へと飛び出すおもちゃ箱の様な展開に会場は笑い声に溢れました。時間としては約三十分の短いお話でしたが、こどもも大人もそれぞれの視点で楽しめる豊かな時間となつたのではないかと思います。

公演の翌日には、「ぼく・わたしの顔、どんな顔」と題したワークショップを開催しました。即興的な遊びで心と体をリラックスさせた後、参加者が持参したポर्टレートにカンパニー・ロディージョが用意したさまざまなイメージを重ねていく手法でワーク

キラリふじみ・レパトリー
「Mother-river Homing」

二〇一五年二月四日(水)、高知市文化プラザかるぼーと小ホールにて、キラリふじみ・レパトリー「Mother-river Homing」が上演されました。

本作品は、昨年度のリージョンナルシアターでもお世話になった、キラリふじみアソシエイトアーティストの田上豊作・演出によるもので、二〇一二年に埼玉県富士見市で制作されました。二〇一三年には富士見市民の要望で再演され、今回は富士見、高知、伊丹、高崎をまわるツアーでの再々演でした。

田上さんのお母様の兄弟をモデルとした舞台は、すべてのセリフが熊本弁で構成され、また背景で流れる音や照明も、そのシーンの天気や時間帯を鮮明に表現しており、出演者の心情をより強く想像させるものでした。また、兄弟ならではのそっけないやりとりや母の温かみなど、本物の家族さながらの雰囲気、笑ったり泣いたり様々な感情を引き出される、演劇の奥深さを感じられた舞台でした。会場の半分を占める広い舞台に、来場者は驚いており、「記憶



再生演劇」とはどんなものかと興味津々でしたが、一つの舞台上で同時に二つのシーンが演じられるなど、驚きの連続でした。「一回公演はもったいない」「次に高知で公演があるときは五十人に声をかける！」など、高知での再演を望む声も多く、大満足のひとときでした。

〈入場者数 八十五名〉



ワークショップは進み、不思議な髪型や、おかしい目や耳などを作っていました。最後に出来上がった、メンバー曰く「クレイジーなポर्टレート」はとても個人的で、参加者はそれぞれのポर्टレイトを見比べては記念写真を撮りました。

今回の日本公演は高知だけということで、メンバーは滞在中たくさんさんの日本や高知の文化を満喫しました。今回の時間が、彼らの次の作品へと繋がっていくことを願います。

〈入場者数・一一五名〉

レクチャーコンサートシリーズ World Music Journey vol.7
ピーター・バラカンが語る「思想としてのロック」



DJ・ブロードキャスターであるピーター・バラカンさんを招き、音楽にまつわる興味深いお話をDJスタイルでお届けするシリーズプログラム。
今回のテーマは「思想としてのロック」と題し、ロック音楽の歌詞や、ミュージシャンが放つ社会的メッセージに焦点を当て、ロック音楽がいかに社会に影響を与えたのか、という視点でピーターさんにお話しいただきます。

- 日時 3月21日(土) 18:30開場 19:00開演
- 会場 高知市文化プラザかるぼーと小ホール
- 料金 一般 前売り 2,000円(当日 2,500円)
- お問い合わせ 高知市文化振興事業団 088-883-5071

風俗

道具をもつ男たち

ランダから始めて、八坪ぐらいの四角形の平家を作った中年男もいる。自宅に薪ストーブを最初から最後まで自分で備え付けた友人もいる。自作のペランダが少々カタついても、ストーブの煙突が少々傾いていてもいっこうに頓着しない。むしろそれを味と心得ているのだ。そうした人たちの多くは、必要に迫

家の修繕やちよつとした家具などもつくり、ときにはお隣さんの雨、いなども直してくれる。ガーデンニングなどにも精を出して、身の回りのことはほとんど自分で済ましてしまう人たちにとって、道具がなければ何事も始まらない。
私の周りには「男は道具だ」といって憚らない人種が多い。自宅のベ

られて道具を揃えていくというより、まず自分が欲しい道具を事前にいっぺんに揃える傾向が強い。だから、いなども使われずに倉庫に眠っている道具も少なくないのだ。
「あれ、要らないんじゃないの」と茶々を入れると、「うん、これはいずれ使うの」とかなんとかいついてい逃れをする。だってもう十数年以上も前から定位置に置かれたままホコリをかぶっているのに！
しかし、「男は道具だ」の男たちはときに、道具といえはドライバーくらいしかもっていない私などには、道具を喜んで貸してくれる有り難い存在となる。道具の使い方を懇切丁寧に教えてくれるし、必要でないものまでこれれもいるのだ。あるんだよね。」などといった貸してくれる。道具の機能を説明することも、欲しいとか借りたというものを持っていることも、喜びになる。
実に愉快で楽しい男たちなのだ。
(森)

第31回
写真コンテスト
「高知を撮る」
入選作品展

このコンテストでは、毎回「高知」をテーマにした写真を募集しています。

今回は「記録写真部門」と「I LOVE 高知部門」にご応募いただきました310点の作品の中から、審査で選ばれた特選4点、準特選19点を含む、入選作品64点を展示します。

ぜひご来場いただき、過去から現在に至るさまざまな高知の写真をお楽しみください。

- 日時 3月17日(火)~22日(日) 10:00~17:00 ※17日10:00より表彰式を行います。
- 会場 高知市文化プラザかるぼーと 7階市民ギャラリー・第4展示室
- 入場料 無料
- お問い合わせ 高知市文化振興事業団 088-883-5071

今号の表紙

「ネモフィラの咲く公園」
松本 稔里

ネモフィラは開花時期が3月~5月ということでネモフィラが咲く公園の写真をアニメ風のタッチに加工しました。ネモフィラは茂みの中の明るい日だまりに自生しており、花言葉は可憐・どこでも成功、等。
就職、転職、退職とみな、それぞれ新生活がスタートする春にぴったりの花なんじゃないかと思ってこの花が咲き乱れる公園の写真を選びました。

(まつもと みりノ / 国際デザイン・ビューティカレッジ1年生)



この頃の水田の耕うんは、ほとんどトラクターになっていましたが、牛がまだ一部で活躍していました。

高知を撮る

農耕牛から“鉄の牛”へ 松本 宣博

第30回写真コンテスト入賞作品

(昭和56年3月 南国市)

「好きな漢字は何ですか？」と問われると、「好きな字を思い起すだろうか。「好き」と一言で言っても、意味が好きとか、なりたちが好きとかいろいろある。私は、あえて由来の好きな字を一つ。蠢く」
中学生くらいの時だったか、この字を見て衝撃を受けた。何とわかりやすい！春になって、虫が地中や木の中からむくむくと姿を現す。気持ち悪いと思う人もいるかも知れないが、そこは「谷叔願い、面白く興味深いなりたちの漢字と理解いただきたい。」
年間数十の舞台芸術、展覧会、作品展などを見て廻る私だが、昨年は県内の芸術家たちの蠢きが感じ取れた企画に何度か触れる機会があった。いの町の「イノ・ピ・オーター」や「工佐塾中・高等学校OB・OG展」が、その代表格だ。芸術家や作家たちは、常に作品の発表の機会を探しているし、それを目標としている。小さなアトリエで、伝手のある喫茶店の隅で…無名の若手作家にとっては、こんな小スペースでの展示が普段は精一

蠢く



風俗歳時記

画ともとても面白く、創作意欲がピンピン伝わってきた。
次世代の芸術家たちは、都会から遠く離れた高知でも蠢いている。むくむくと姿を現し始めた次世代のクリエイターたちを、湿かい目で見守り応援していきたいものだ。
(立花香)

杯だったりする。一人ひとりの力は小さいかも知れないが、新進気鋭の芸術家と支える人たちが力を合わせて発表に臨んだ企画が前出の2つである。伊野の商店街に点在する展示会場を、地図片手に探していくという斬新な展覧会。空き店舗や倉庫に展示された作品の数々と対面し、店番？をする作家自身の解説を聞いたり、鑑賞者の反応を観察したり。
一方、大学を卒業してしまつた芸術家は、自力で作品を発表することが難しくなる場合が多いが、OB・OG展では、同じ高校に思い出を持つという共通項の中で、一人ではできない大きなチャレンジをした。両企

出光

「音楽には、国境はないが国籍はある」

和太鼓・三味線・箏・尺八・篠笛・鳴り物などの和楽器を
もっとわかりやすく、かっこよく、シンプルに！



～土佐グリーンパワー[※]土佐発電所 竣工記念～

AUN J クラシック・オーケストラ コンサート



コンサートでは石黒香基(尺八)の代わりに
田中肇山(たなかほしる)が出演します。

AUN J CLASSIC ORCHESTRA

Japanese traditional instrument musicians

2015.4.5 SUN

高知市文化プラザ かるぽーと

OPEN 13:00 / START 14:00

コンサートへ
無料ご招待

900 名様

【主な演奏】

春よこい、あうん三味線、ボレロ、
故郷、ONE ASIA など
皆さんがよくご存知の歌謡曲、
アニメソングからクラシックまで
幅広く和楽器で演奏します！

高知らしい活力に満ちたコンサート

地元よさこいチーム
(帯屋町筋)との共演



開演前にロビーにて
井上良平・公平による
子どもたちへの和太鼓
体験があります！



[※]土佐グリーンパワーは、高知県の森林資源を活用した木質バイオマス発電に取り組んでいます

コンサートについてはホームページでもご覧頂けます ●出光興産 <http://www.idomitsu.co.jp/kochi> ●土佐グリーンパワー <http://www.tosa-gp.jp>

〈主催〉出光興産株式会社

〈共催〉高知県、高知市、高知市教育委員会、公益財団法人高知市文化振興事業団、株式会社四国銀行、高知県森林組合連合会、とさでん交通株式会社、土佐グリーンパワー株式会社

〈後援〉高知新聞社、RKC高知放送、KUTVテレビ高知、KSSさんさんテレビ